

日本の「間」鮮やかに視覚化

独・フランクフルト市現代芸術家那須氏の特別展

ドイツ・フランクフルト市在住の現代芸術家、那須秀至氏が70歳を迎えたのを記念し、同市文化庁は那須氏の特別展「Spiegelteich」を21日まで、市内で開催している。同庁は「コロナで人々の生活が制限される厳しい時代にこそ、芸術の価値が再発見される。世界の在り方を再考する上で芸術が果たす役割は大きい」と、日本の感性を紹介する意義を強調する。

那須氏は1950年、さいたま市生まれ。77年にドイツに渡り、フランクフルト市のシュテファン・フォン・ブッシュ美術館で非常勤講師として版画グラフィックを教えた。以後、現地に拠点を置いてアーテ



①特別展会場の床面に展示された「鏡池」＝ドイツ・フランクフルト市②特別展会場に展示された「水産」

イスト活動をしている。和紙と蜜蝋を使った独自の技法で光の奥深さを表現するなど、簡素で静かな作風が目を引く。黒塗りの木盤に水を張った代表作「鏡池」や、蜜蝋と漆で耐水性を持たせた「水産」は、水面に映る影像が周囲との思いがけない調和をもたらし、日本独自の「間」の概念が鮮やかに視覚化される。

フランクフルト工芸美術館のシュテファン・フォン・デア・シューレンブルク東洋部長は「鏡池」「水産」について、「空間との対話、時間と忍耐、感覚との遊びを表現している。水が蒸発することは『無常』を示唆する。非常に詩的で瞑想的。こうした形の芸術はドイツや欧州では見たことがない」と話す。



那須秀至氏